

## 第115回 三方限古典塾（'16. 5, 19）

### 洪 自誠（1561～1616）「葉根譚」（その3 - 32）

- 1 林間の松韻、石上の泉声は、静裡に聴き来たらば、天地自然の鳴佩なるを識る。  
草際の煙光、水心の雲影は、閑中に観去らば、乾坤最上の文章なるを見る。

後集 63

（意識） 林をわたる松風の響きや、岩間を流れる泉の声は、心を静かにして耳をかたむけるならば、天地自然が奏でる絶妙な音楽であることがわかる。

また、果てしない草原が尽きる辺りにたなびく霞や、澄んだ水面に映る雲の影は、心をのどかにして眺めるならば、そのまま天地自然が描いた最高の絵であることがわかる。

（余説） 松風の音・松韻は松籟ともいいます。鳴佩とは貴人が腰につける佩玉が発する音で、ここでは妙なる音楽の意です。文章とは、種々の色を交叉させたあや模様で、文は青と赤のあや、章は赤と白のあやです。天地自然が奏でる音楽も描く絵も、己の心を静かにし、のどかにしていないとそのすばらしさには、気づかないことになります。

前回の「青山緑水の雲煙を吞吐するを看ては、乾坤の自在なるを識り、」に通じるものです。また、文部省唱歌「我は海の子」を連想します。この海岸と松原は天保山だそうです。

（参考） 文部省唱歌「我は海の子」 作詞：宮原晃一郎（鹿児島市加治屋町出身・明治13生）  
我は海の子白浪の さわぐ磯辺の松原に 煙たなびくとまやこそ 我が懐かしき住家なれ  
生まれて潮に浴みして 浪を子守の歌と聞き 千里寄せくる海の気を 吸いて童となりけり  
高く鼻つく磯の香に 不断の花の香りあり 渚の松に吹く風を いみじき楽と我は聞く

- 2 眼に西晋の荆榛を看るも、猶白刃を矜り、身は北郎の孤兔に属するも、尚  
黄金を惜しむ。語に云う、「猛獣は伏し易きも、人心は降し難く、谿壑は填め  
易きも、人心は満たし難し」と。信なるかな。

後集 64

（意識） 昔滅びた西晋の廢墟に、イバラやハシバミが生い茂っているのを眺めながらも、なお人々は武力を矜り、戦いをやめようとしなない。また、その身は北郎の墓地に葬られて、兔や狐の餌食になるのを知りながら、なお黄金に執着し、惜しんでいる。

古語にも「どんな猛獣でも飼い慣らすことは易しいが、人の心を降伏させることは至難だ。どんな深い谷でも埋め尽くすことは易しいが、人の心を満たすことは至難だ」とある。まったくそのとおりである。

（余説） 西晋は、三国時代（魏・呉・蜀）を統一した司馬炎によって建てられた国（265～316）です。北郎は、西晋の都であった洛陽の北にある邙山のことで、貴人の墓が多くあり、ここに葬られることが理想とされていました。

人の心とは実に御し難いもので、仏陀の言葉「法句経」にも「心はざわめき動き、持ち難く、調え難し」「心は保ち難く、軽く立ち騒ぎ、意のままに従いゆくなり」「心は遠く去りゆき、またひとり動く、密室にかくれて形なし」などとあります。

（参考） 明治天皇御製「しのびても あるべき時に ともすれば あやまつものは 心なりけり」  
高杉晋作辞世「おもしろき こともなき世を おもしろく 住みなすものは 心なりけり」

3 峨冠大帯の士も、一旦、輕褰小 笠の飄々然として逸するを睹ば、未だ必ずしも其の咨嗟を動かさざるものあらず。長 筵広席の豪も、一旦、疎簾浄几の悠々焉として静かなるに遇わば、必ずしも其の縉恋を増さざるものあらず。人、奈可んぞ、驅るに火牛を以てし、誘うに風馬を以てして、其の性に自適するを思わざるや。

後集 66

(意識) いかめしい冠や広い帯を着けた高位高官たちも、ひとたび、軽いみのや小さな笠の粗末な身なりで、何ものにもとらわれずにのんびりやっている人たちを見れば、気苦勞の多い自分の身と比べて、うらやしくて嘆息しないものはいない。

また、豪華な敷物の上で暮らしているような富豪たちも、ふと、粗末な竹すだれとござっぱりした机に向かって、悠々然として静かに暮らしている人を見れば、自分もそうでありたいと思わないものはいない。

それにもかかわらず、世間の人には尻尾に火を着けられた牛のように駆り立て、さかりのついた馬を誘惑するように功名富貴を追い求めるのか。もっと自分の本性にかなった生活をしようと思わないのだろうか。

(余説) 前章の「人の心を満たすのは難しい」に続いて、「身軽でゆったりとした生活が理想」であると訴えています。ウルグアイのムヒカ元大統領を先日我が国を訪れ、その生活の様子から、世界一貧しい大統領として話題になりました。その言葉「世界を変えられるわけではないが、自分を変えられる」が印象に残りました。

(参考) 老子70章「是を以て聖人は、褐を被りて玉を懐く」 被褐懐玉

4 狐は敗砌に眠り、兔は荒台に走るも、尽く是れ当年の歌舞の地なり。露は黄花に冷やかに、烟は衰草に迷うも、悉く旧時の争戦の場に属す。盛衰何ぞ常あらん。強弱安くにか在る。此れを念えば、人の心をして灰とならしむ。

後集 68

(意識) 崩れ落ちた石だたみには狐が眠り、荒れ果てた宮殿の跡を兔が走り回っているが、このあたりは、その昔、宮女達が華やかに舞い踊った場所である。菊の花が冷たい露にうたれ、枯れ草には霧がかかっているが、ここはその昔、激しい戦いがくり広げられた古戦場である。栄枯盛衰は世の常、強者も弱者もどこに行ったものか。このことを思い浮かべると、人の心を冷えきった灰のようにさせてしまう。

(余説) 先月の4「諸行無常の響き、盛者必衰の理、春の夜の夢の如し」の続篇です。鴨長明の方丈記でも「ゆく河の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず。よどみに浮ぶ泡沫は、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例しなし。」とあります。

(参考) 劉庭芝作「代悲白頭翁」 但だ見る古来歌舞の地 惟だ黄昏鳥雀の悲しむ有るを」  
曾鞏作「虞美人艸」 三軍散じ盡きて旌旗倒れ 玉帳の佳人座中に老ゆ  
香魂夜劍光を逐うて飛び 青血化して原上の艸と爲る 芳心寂寞として寒枝に寄せ  
舊曲聞き來りて眉を斂むるに似たり 哀怨徘徊して愁いて語らず 楚歌を聴きし時の如し  
滔滔たる逝水今古に流る 漢楚の興亡兩つながら丘土 當年の遺事久しく空と成る  
慷慨尊前誰が爲にか舞わん